

新井正人君 博士学位請求論文 審査報告

論文題目： 鷗外文学の学的背景  
—— 心理学・隣接諸学受容の射程 ——

論文審査担当者

|    |                          |        |
|----|--------------------------|--------|
| 主査 | 慶應義塾大学教授（文学部）<br>文学研究科委員 | 屋名池 誠  |
| 副査 | 慶應義塾大学教授（文学部）<br>文学研究科委員 | 佐藤 道生  |
| 副査 | 慶應義塾大学名誉教授               | 松村 友視  |
| 副査 | 大妻女子大学教授（文学部）            | 須田 喜代次 |

論文要旨

本論文は、森鷗外旧蔵ドイツ語文献の調査・分析、および文学作品の解析を通して、鷗外初期における心理学やその隣接諸学の受容の様相を跡づけ、これらの学的知見が鷗外文学の生成・発展に関与した形跡の解明を試みたものである。

本論文は以下のように構成されている。

序章 「心理的観察」の学的背景

第一部 主体の言説的構築

- 第一章 「言葉」としての心理—鷗外における心理学受容—
- I 心理主義的時代思潮
  - II 帰納的形而上学への夢
  - III 科学的心理学の受容
  - IV 心理学と文学の接点

- 第二章 Seele をめぐる論理—心身問題と鷗外—
- I 性質二元論の受容
  - II 「主物」と「主心」の「併行」
  - III 科学的心理学と心身問題
  - IV 「魂と肉体」の文学

- 第三章 構成的外部への理路—鷗外と識闕下—
- I 芸術創作理論と識闕下
  - II 識闕下をめぐる学知

- III 表現戦略としての識闕下
- IV 主体の構成的外部

## 第二部 主体の言説的脱構築

### 第四章 倫理的主体の形成と変容—鷗外と教育思想—

- I 倫理的行為の存立要件
- II 「選択の自由」としての自由意志
- III ヘルバルト教育学の受容
- IV 「混沌」としての主体

### 第五章 "Vita sexualis"という言説装置—鷗外におけるクラフト=エビング受容—

- I 『性的精神病質』の日本への移入と鷗外
- II クラフト=エビング受容の様相
- III 「キタ・セクスアリス」の生成
- IV 「告白」の不可能性

### 第六章 表象心理学と物語行為—鷗外文学の構築方略—

- I 表象心理学の枠組み
- II 心理の因果的構成
- III 「雁と云ふ物語」の心理描写
- IV 「雁」の表現戦略
- V 「物語のモラル」

## 第三部 学的背景の実相

### 第七章 G. A. リントナー『経験的心理学教本』受容の様相

### 第八章 O. キュルペ『哲学入門』・『心理学概論』受容の様相

## 参考文献

## 論文の概要

本論文の基本的な手法は、東京大学総合図書館鷗外文庫に所蔵される鷗外手沢のドイツ語文献の内容と、それらに対する鷗外の書き込みの丹念な調査・分析に基づき、心理学を中心とする学知の受容とその反映を跡づけることにある。

その方法の研究史上の意義を述べる序章では、19世紀末のドイツを中心とする「心」をめぐる学知の受容の様相と、その文学的表現への反映のさまを共に跡づけることによって、近代小説における「心理的観察」の表現史に鷗外を位置づけようとする本論の趣旨が概観される。

これをふまえて第一部では、同時代ドイツ語圏の学術的言説の受容を背景に文学活動において内面心理に中心化された主体が形成されるに至る過程が具体的に辿られる。

まず第一章では、W・ヴントやO・キュルペの思想史的位置づけをふまえ、思弁的な心理哲学から科学的実験心理学への移行期にあった心理学の状況を概観し、近代心理学を中心とするドイツ語圏の諸学の受容が鷗外文学生成に与えた影響を跡づける。

新井君は、ドイツ留学中の鷗外が、A・シュヴェーグラー『西洋哲学史』（第14版、1887）やJ・J・ボレリウス『現代独仏哲学瞥見』（ドイツ語訳、1886）などを通じて自然科学と哲学との総合を志向する19世紀後半の思想的動向に関心を示したことを

踏まえ、その構図のうちに同時代ドイツ語圏の心理学の動向を重ね、心的領域への鷗外の関心が、のちの文学的営為に不可欠であったと位置づける。

帰国後の鷗外は、E・v・ハルトマンの観念論的思想やA・ショーペンハウアーの主意主義的哲学に影響を受けつつ評論活動を展開したが、新井君は、鷗外の関心が徐々にヴントの帰納的形而上学構築の試みへと移行し、さらにG・フェヒナーの美学やF・パウルゼンの倫理学の受容を通じて諸学の基礎たる心理学の重要性の認識に至ったとする。さらに、小倉在任中にG・A・リントナーの著書を通じて受容したJ・F・ヘルバルトらの経験心理学が、人間心理を言語的構築物として把握し、かつ、心的過程は言語的に表象されるという認識をもたらしたとし、それが文壇復帰後の鷗外の表現実践やメタフィクシオンの戦略を方向づけたとする。

つづく第二章では、心身問題に関する学術的言説の受容の様相を明らかにし、文壇復帰後の文学活動にそれが反映される過程を跡づける。

鷗外はドイツ留学中からボレリウスの著書などを通じて心身への関心を示していたとみる新井君は、フェヒナーやR・H・ロツツェらによる「性質二元論」（中立一元論）への知見を通して鷗外の心身観が形成されたとする。さらに小倉時代にリントナーの著書によって受容した経験心理学や心身並行説への関心などから、「魂」と「肉体」の相互的かつ有機的關係性に着目したとし、こうした人間把握が、文壇復帰後、自然主義文学の唯物論的人間観に抗する文学表現に結実したと意味づける。その上で、その端的な現れを長篇「青年」（1910～1911）に見出し、そこに託された魂と肉体の有機的併存というモチーフを「新ロマン主義」的文芸思潮のうちに位置づける。

第三章では、同時代における「識閥下」をめぐる言説への鷗外の関心と受容を跡づけ、いくつかの鷗外作品にその展開の跡を捉える。

鷗外はボレリウスの著書などを通じて留学中からヘルバルトやフェヒナーらの「識閥」概念に関心を示していたとする新井君は、帰国後の鷗外が重点的に依拠したハルトマンの芸術論を、意識の背後に識閥下の領域を併せもつ流動的存在として主体をとらえたものと位置づけ、その後の小倉時代の経験心理学受容と併せ、創作の対象であると同時にその源泉としての識閥下への関心が創作に反映したとする。その具体例として短篇「魔睡」（1909）を取り上げ、催眠術を素材とする同作が、むしろ理性的な意識と識閥下の欲望との間で揺らぐ主人公の内面に焦点化していることを指摘する。また「青年」の主人公は自らの識閥下に創作の源泉を求めたとして、自然主義的決定論に囚われぬ文学表現の模索をそこに読み取っている。そして、このような鷗外の表現的实践は、自然主義的リアリズムとは異なる方法で識閥下の力動を抱え込んだ流動的主体を表象しようとする戦略的な試みであったと位置づける。

第二部は、心理学の学知の受容をふまえて内面心理に中心化された主体を形成し、その心理的変容の叙述を文学的方法として構築した鷗外が、その先に、そうした主体のありようをさらに脱構築していこうとする志向を示していたことを作品分析を通して明らかにする。

まず第四章では、教育に対する鷗外の関心が、普遍的な個人の主体形成の問題として文学的営為に反映し、さらに晩年の思索に継承されたことが跡づけられる。

小倉時代の鷗外はパウルゼンやキュルペの著書などを通じて倫理をめぐる思索を重ねているが、新井君は、「良心」などの内的要因が社会的な倫理的標準を意識化するところに倫理が実践されるとする倫理観を前提に、鷗外は、主体的な意志による選択

の自由と社会的陶冶可能性との関係を視野にヘルバルトの教育学を受容したとする。

他方、新井君は、支配的な規範の不断の脱構築と新たな規範の模索という混沌とした主体観を鷗外がもっていたとし、既存の規範の超克と新たな規範の再創出の可能性をめぐる「青年」中の議論にその反映をみる。

つづく第五章では、クラフト＝エビング『性的精神病質』（1886）を通じた性科学の受容が性をめぐる鷗外の言説や文学作品に反映する様相を明らかにする。

鷗外はクラフト＝エビングの受容を基盤として新しい学問領域としての性科学を日本に導入する先駆的な役割を果たしたが、その際、鷗外は、医学的な「知」による性の対象化と、正常／異常の分節の構図を通して性を医学的知の管理下に組み込もうとする志向を内在化させていたとする。

こうした発想は、クラフト＝エビングの受容を反映させた小説「キタ・セクスアリス」（1909）に明らかだが、性教育の可能性の問題を視野に自らの性欲史を客観的に記述しようとする主人公の行為は、逆に性科学の知によっては領略しえない性のありようを露呈させ、性の知的言説化の権力性を可視化したとする。その上で、自然主義文学における性表現を視野に、性の告白という言説形式に依拠した性科学・性的精神病理学自体の批評をふまえて、同作は、知の枠組みに嵌め込むことのできない人間心理の多形性を浮き彫りにしたと結論づける。

第六章では、表象心理学の受容が人物の心理的必然性や動機の精緻な記述に鷗外を向かわせたとし、長篇「雁」（1911～1913）にその実践と脱構築のありようを捉える。

鷗外は、小倉時代にヘルバルトの表象心理学の概説書であるリントナー『経験的心理学教本』（改訂増補版、1891）を通じて表象心理学を受容した。それは、識閥の境界における表象の浮沈を示す流動体として心理を把握するものであり、鷗外は、こうした観点から、「雁」において、人物の内部の心的因果を精緻に記述する語り手を設定したとする。その一方で新井君は、「雁」の語り手が、語る行為自体をも対象化し、語り手による物語構築の恣意性を露わにすることによって語りの権力性を自己批評的に示す戦略性を孕んでいるとし、表象心理学の受容がもたらした心的因果の記述の限界への認識を踏まえて自らの小説美学を批判的に乗り越えようとする鷗外の戦略をみる。その上で、不可知の領域としての識閥下を語ることの権力性への抑制が、「史伝」という新たな表現形式を導いた要因のひとつであったと結論づける。

第三部は、上述の立論の拠りとなった主要な鷗外手沢本への鷗外の書き込みの翻刻・翻訳および一部本文の翻訳を掲げる。

第七章は、リントナー『経験的心理学教本』のうち、鷗外の書き込みが多数認められる序説第一章本文の翻訳と、鷗外による書き込み全文の翻刻・翻訳である。新井君は鷗外の書き込みに、留学時代のドイツ観念論への関心を引き継ぐ面が顕著であるとし、留学時代の思索と小倉時代の心理学受容とを接合する理路をそこに見出している。

第八章は、キュルペ『哲学入門』初版序文の一部の翻訳と鷗外による書き込みの翻刻、およびキュルペ『心理学概論』への鷗外書き込みの翻刻である。『哲学入門』への書き込みから、小倉時代の講演「倫理学説の岐路」（1900）や『経験的心理学教本』精読の際にこれが参照されたことがうかがえるとし、『心理学概論』については、小倉時代に心理主義的美学を受容する際に参照されたとする。

## 審査要旨

「鷗外文学を読み解く上で心理学との関係性を軽視することは出来ない」とする基本的な観点から、新井君は本論文を「鷗外という視座に立って、近代小説における「心理的観察」の表現史を照射する試み」と要約している。鷗外のみを焦点化する本論文が近代小説の「表現史を照射する」だけの射程の深度を示しているわけでは必ずしもないが、鷗外文学の根底を支える基盤として、鷗外が学び摂取した心理学およびその隣接諸学の実態を調査・検証し、それらが鷗外文学にどのように反映され、かつ発展的に推移していくかを明らかにしようとする意図は鮮明である。

その意図のもとで、本論文は、以下の三点を主軸として展開される。すなわち、第一に、心理学を中心とするドイツ語圏の学術的言説の受容の様相を思想史的な視野の中で位置づけること。第二に、それら学術的言説の受容が文学作品に反映されるさまを具体的に検証すること。第三に、そうした過程の中で構築された文学的方法が、鷗外の作品史の中でさらに発展的に脱構築されるさまを動的にとらえること、の三点である。

そのために論者が基盤に据えた方法は、東京大学総合図書館鷗外文庫に所蔵されている鷗外旧蔵のドイツ語文献の徹底的な調査である。それら文献の記述内容の把握はもちろんのこと、鷗外自身による書き込みやアンダーラインなどを網羅的に調査し、これらの著書から鷗外が学び取ったと推定される学術的成果を具体的に検証することが試みられる。鷗外手沢本調査の具体相は、第三部における鷗外旧蔵書への自筆書き込みの翻刻と翻訳にその一端をうかがうことができる。

こうした緻密な分析作業が論者の高いドイツ語読解能力によって初めて可能であったことは論を俟たないが、巻末に掲げられた「参考文献」一覧に明らかなように、本論文は、第三部に取り上げられた三文献のみならず、鷗外文庫に所蔵される鷗外旧蔵の心理学・哲学関係の広範な著書の調査・分析を踏まえており、その点において、まさに労作と呼ぶにふさわしい内容になっている。鷗外研究史において、こうした研究の先駆的な業績として、小堀桂一郎『若き日の森鷗外』(1969)や清田文武『鷗外文芸の研究 青年期篇』(1991)等が備わるが、本論考は、そうした先行研究の蓄積を、心理学とその隣接諸学に特化しつつ一層広範に展開したものであり、本論文の中心をなす第一部・第二部の論考群は、いずれもこの丹念な作業の上に成立している。

心理学を中心としつつも、哲学・美学・倫理学・教育学・性科学などの諸学の相関を領域横断的な視野で跡づけようとする試みも、鷗外の関心の多角性を跡づける上で不可欠な視座である。そうした多角的な学術的知見を鷗外文学の作品史的な地平に位置づけることで、初めて鷗外作品生成のメカニズムを新たな視点から捉え返す有効な視座が提供されるはずであり、「テエベス百門の大都」と称される広範多岐な活動を総合的に捉えるための有効な方法と言ってよい。

こうした方法が最も整合的に示されているのが、オーストリアの精神病理学者クラフト＝エビングの性科学の受容の様相と、小説「キタ・セクスアリス」への反映を論じた第五章である。

「キタ・セクスアリス」が性科学の受容のもとに執筆されたことは夙に指摘がなされているが、受容の具体的様相とその影響の検証はいまだ十分ではない中で、論者は、クラフト＝エビングの『性的精神病質』を参照枠にすることで、同時代のドイツ語圏

において誕生間もない性科学の移植における鷗外の先駆的な役割を明らかにする一方、性をめぐる鷗外の言説が、「性を医科学的な知の管理下に組み込んで行こうとする」傾向をもつことを指摘する。さらに論者は、『性的精神病質』に「キタ・セクスアリス」(Vita sexualis) という語彙が頻出することなどの指摘を踏まえて、作品の主人公・金井は「性科学知を内面化した主体として造形されている」とし、「キタ・セクスアリス」は、そうした「知の枠組みにより性を言説化することの限界を呈示」するものと位置づける。論者が本論考全体を通じて取ってきた方法の鮮明な現れとして、綿密な調査にもとづきクラフト＝エビングの性科学受容の様相を具体的に検証した点で説得力をもつ論になっている。

ただし、本論文の三つの軸のうち、学術的言説の受容を跡づける第一の軸が資料的な具体性を伴って説得力をもっているのに対して、それを第二、第三の軸につなげていく際の個々の意味づけや、論点間にわたる論証過程において問題点がないわけではない。

第一部において論者は、鷗外の心理学受容を、留学時代以来の鷗外の思想的枠組みともいべき「自然科学と哲学との総合」という構図の中に位置づけ、その総合への過程において心理学受容の果たした役割を中心化しようとしている。鷗外における「自然科学と哲学との総合」という思考の枠組みは先行研究によって提示されたものであり(松村友視「「戦闘的啓蒙」の論理—鷗外初期言論の構造と背景—」[2002])、本論文第一部はこの枠組みを一方の前提とするため、個々の立論がおのずから演繹的な論理構造を示すことになる。ことに、先行研究が、ドイツ観念論の思想的系譜を視野に、鷗外のドイツ留学時代における「自然科学」と「哲学」および「Seele (魂)」をめぐる認識論的思考の跡を辿ることで上記の枠組みを提示したのに対し、本論文は、その構造をほぼそのまま心理学における心身の関係といったレベルの問題にスライドさせ、これをあえて中心化しようとするため、心理学の受容と文学作品への反映の両側面において、一部に恣意的な論理展開をもたらしている。

論者自身がいうように、「留学中の鷗外が心理学に特化した著作を繙いた形跡はない」ことや、心理学の具体的な受容が小倉時代を中心とするという事実(この点は前掲の清田文武に指摘がある)が端的に物語るように、留学時代に示された「総合」への意志の背後にあったのは、より大きな認識論的問題系であり、そうした関心は帰国直後から晩年に至るまでの鷗外の文学的営為全体に底流している。

もちろん、思弁的・形而上学的な心理学から科学的な実験心理学・経験心理学への過渡期にあった同時代の心理学が、自然哲学から自然科学へという大きな流れのうちに包摂されることは確かだが、認識論的な問題系と心理学への関心とが鷗外の内部でどのような位相関係にあったかについては厳密に見極められなければならない。

たとえば、留学時代の鷗外のドイツ語メモ「感想 1887」で鷗外は、「自然科学」と「哲学」との対比に帰納／演繹という科学的方法の対比を重ね、さらに「唯物論」と「観念論」の対比に続けて「物質」と「魂」とを比較し、これらを「二つの統合し得ない、——あるいはまた分割不可能でもある、いずれにせよ比較対照することのできない大きさ」として認識論的な地平で意味づけている(この点は前掲の松村論文に指摘がある)。論者はこれをそのまま心理学に重ね、鷗外は「肉体と魂」を統合も分割も不可能なものと理解していたとした上で、これを「青年」に適応し、作品のモチーフとしての「人間観」や主人公純一の「人生観」につなげていくといった論理展開は、

論理的な位相差を閑却した一例である。前提部分の実証が十分になされないまま問題が提起され、その前提に基づき後半部の主張が展開される傾向がみられるのも、立論の枠組みを個々の論点における先行研究に求める傾きのある本論文の演繹的な論理構造から導かれるものと考えられる。

鷗外旧蔵書の調査分析にもとづく学術的言説の受容の検証が具体的成果を示してしており、それを踏まえた個々の論点に新見も認められるだけに、それらを思想史的な大枠の中に性急に位置づけたり、その反映の形跡を鷗外作品の中に恣意的に求めるよりも、学術的言説の受容の実証的検証に踏み留まり、厳密な論理的整合性の中でそれを跡づけることで、手沢本をめぐる綿密な作業の成果は一層活かされたと思われる。

とはいえ、上記の問題点は、鷗外研究史における新たな視座としての本論文の有効性自体を否定するものではない。鷗外における心理学および隣接諸学の受容の問題が、鷗外研究においても、また近代文学の表現史においても重要な意味を担っていることは動かない。しかもその問題は従来の研究史において十分に掘り下げられてきたとは言い難い。

この意味において、同時代ドイツ語圏の心理学を中心とする広範な学術的言説の受容の様相を資料に基づいて詳細にたどった本論文の基本的成果は、論証の手続きに対する厳密な批判という前提条件を伴いつつも、この主題をめぐる研究の端緒に位置づけるに足るものといえる。

以上の諸点から、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位授与にふさわしいものであると判断するものである。